

谷茶前 沖繩

一、谷茶前 浜に

谷茶前節は沖繩本島の観光バスのガイド嬢が必ず歌うほど一般に知られてきた。谷茶は西海岸恩納村の一部落。名所の一つになっている谷茶前の浜は潮流の関係で魚の大群がよく来る。その時の情景を歌ったものが谷茶前節。歌詞の大意は「浜にキビナゴが寄ってきたとき。キビナゴぢやなくてイワシだとき。若い男たちが捕ってきた魚を、娘たちが炭に入れ頭にのせて売りに行った。売ったあとの娘たちの匂のえもいぬことよ。」

谷茶前は沖繩舞踊の中で雑踊（女雑踊）に属する。雑踊という語は、組踊などを楷書と見れば、草書にあたる草踊というべき語が不用意に転訛したものである。雑踊は賀慶使一行の筑登之が江戸で舞った筑舞に創まるといわれ、祝儀の時に隠し芸で演ぜられる自由型乙女舞となり、その中から「醜童踊」などの古典物も生まれた。しかし創作舞踊として画期的な発展を遂げたのは、廃藩置県によって大衆的に芝居興行化の始まった明治12年以後である。沖繩の古典舞踊を基準にして琉舞や日舞の諸技を総合し、特に、沖繩民踊の要素を大胆にとり入れたこと、テンポを早めたこと、自由型乙女舞によって一定の型を作ったことなどが、踊の内容や効果を飛躍的に高めて、万人向きの軽快明朗調となった。かくて多くの雑踊が次々に創作された。谷茶前を初め、浜千鳥節・鳩間節・麦薬・早天川・花風・貫花など、一般に親しまれている沖繩舞踊の多くは雑踊である。

谷茶前は最初の雑踊として、最初の芝居小屋である叭芝居屋で明治16年（1883）ごろ生まれた。振付者は当時16歳の玉城盛重氏。踊は男女の相舞で、芭蕉衣を着、頭を手巾で包み、男は權を、女は炭を持ち、もつれ合って踊る。あまりに有名な踊なので師匠たちによって振りを変えられたものがあることは注意を要する。本書に記載の踊は、琉球政府が、祖国復帰を機に沖繩全島の学校や婦人会を初め日本全国に普及する大衆踊としてとりあげたため、日本フォークダンス連盟に委嘱されたもので、振付者は玉城盛重氏の芸統を直接引いている川田礼子氏。相舞で持物はなく、雑踊の特徴を十分に盛りこんだ振付である。

スルル小が ゆててんどうへい
スルル小が ゆててんどうへい

(囃子) ナンチャ マシマシ

でアン小ソイソイ

でアン小約束(以下同じ)

二、スルル小や あらん

大和ミツンど やんでんどうへい
大和ミツンど やんでんどうへい

三、兄上達や うり取いが

姉小や かみてうり売いがへい

姉小や かみてうり売いがへい

四、うり売て 後ね

姉小が 匂いぬ秀らさへい
姉小が 匂いぬ秀らさへい

五、あの森に 登て

互に 思い語らへい

互に 思い語らへい

今回は、堀氏の要望を入れ、たんちやめのうた、の特集ですが...

上の解説などは、おなじみ日本FD連盟の「ふるりの民踊2」から。
右の折りこみは、わらび座の「日本民謡合唱集」(原太郎編)の1集からです。
踊りについては Zurchan #10 を ごらん下さいませ。

